

# ふるさと総合

## 聞きたいたい 言いたいたい

〈米国の非営利国際教育組織「ピープル・トゥ・ピープル」(PTP)財団〉が昨夏、国際親善のため、世界四十八コースに約二万七千人の学生を派遣した

「学生大使プログラム」。本県は北松小値賀町や平戸市のホームズ

ティを中心に約三百八十人を受け入れ、参加者アンケートで「世界一」の評価を獲得した。誘致や企画、受け入れまで中心的役割を果たした立役者「話を聞いた」

「米国の若者に「世界一」の評価を受けた。非常にうれしい。甲子園に初出場し、初優勝するような出来事では。

成功した理由は、三つある。本県の自然や歴史など素晴らしい素材。二つ目は小値賀町などの地域に人を呼び込む受け入れ態勢や人材があった。三つ目は県や民間

# 人材養成し異文化に橋を

による支援が機能した。人との触れ合いは重要。人が触れ合い、心が通う仕掛けが優れていた。

一五泊六日のプログラムには、長崎市内で被爆者の体験を聞く平和学習を盛り込んであった。

学生たちは、ホームズティで人と人との心の触れ合いをし、長崎市を訪れて被爆体験講話を聞く。米国の原爆投下を正当化するようなレベルを超え、心の底から涙を流す。こうした交流を積み重ねないと平和はない。

「世界一」の実績で米国から何千人、何万人も本県へ連れてくること

国際教育事業コーディネーター

## 小関 哲さん(28)



ができる」と強調する。

留学した私や、今回の受け入れで活躍した国際経験がある若手スタッフには、米国人学生と完ぺきに交流できる英語力や国際センスがある。親友

流できる能力がある。一PTPの継続的な受け入れ態勢充実についても、県や関係各団体が一体となり動きだした。

「世界一」というバブルを揚げられたこと (聞き手は報道部・吉岡俊治)

や友人と話すような深い交流ができる。地元の学生ら、若い人材を養成すれば異文化に大きな橋を懸けることができる。長崎人には世界と堂々と交

で、ある意味、自分の手を離れた。「最初は受け入れは難しいのではないかと」思っていた人たちに化学反応が始まっている。県内ではそれぞれ頑張っていた人がいて、自分だけが海外と日本だけでなく地域のひとりが

おせき・さとし 平戸市出身。国際学校 United World College 英国校、京大法学部卒。カナダで野外活動

指導者のトレーニングを受け、独立。2004年から国際交流、体験教育企画のコーディネーターを仕事としている。